絵入

伊勢物語

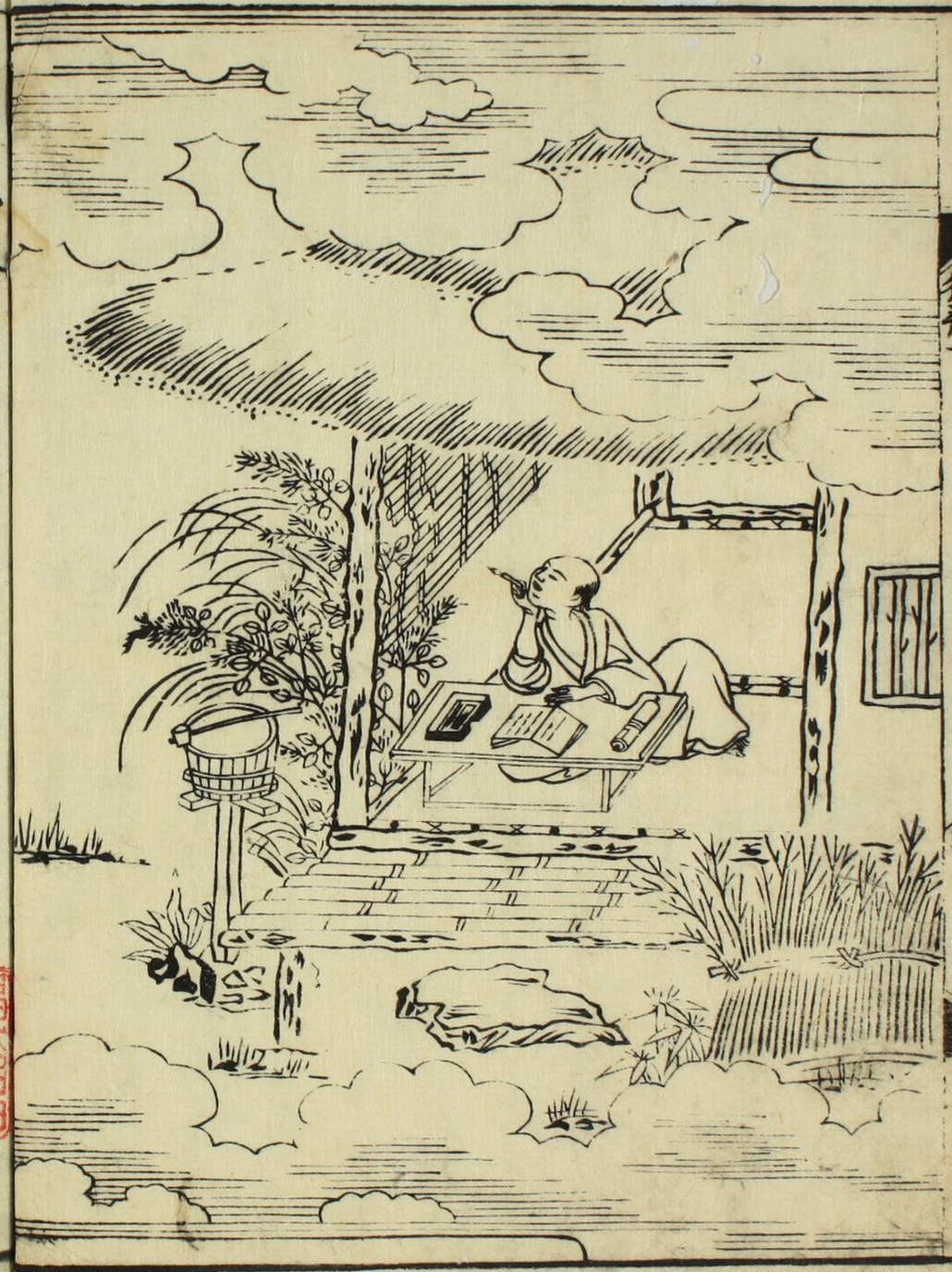
一

特別
へ13
4382
1

貴
N13
4382
1

清盛こうるまつ小殿の麓うしひてもつ殿うさうひ
殿をよりてとそのうちをりのゆけまとはれず
うそ殿さうけまいぐやまぐもろうわくいめぐ西
しうへきまうぐ殿をもらのたりを色いハ
ひもうぐまう酒のそはうれをいうやうそ人所
のをいをなう殿ぐさいぐらのひぐをんれ
かわまさ西いはまわうくも情蛭をぐたうこさ
をいをあうくとうをそのうをそぐていハ殿てみぐ色
どうをとなうぐけうくそれうと殿ぐさいわうう
はうをつう殿央のうあひためりぐかたうをのうけぐ
いうくしおうつをくいうくえをまうをうしぐ
うをうくやまうかあのをうくくよハ切新ぐん

唐ゆよしのうちにも俳諧とかいふ事ハふかくもけいこされ
しかもしいまだなくさらにみちのく農人までもよく此みち
いそのしにハみなもてはやす野夫しつとめのいとまあるひまにや
明年除人ハ楢のおほかん情ふかきをいつくしんともそれ
かゆかれしるさの世をそへ人ハ何もしも能すかりし糖
もはらをん人いまもさわりきこさ伝のもちがんさしつへきそあ
さましろく人々も猶除る流しろくをあ
けに唐ゆふかくしてかかりつまりかくてそわりども
まろくしゆきそろしを以稗の粳とうせう
なきれんそうふかきなかにかのならくしも滝らさひ
このもしくはぎたる名人なるやうにてかごまう來るあつき
まし哉ふもうをはうをさうんかさざしつのか
ちひろく人をはげみてよなかハなまはしにしもしき新わか
くしきなれる人ひまもおまりそのあまけのかる
こそ東ひいさきかきてあらつさうかを筆しハ海かく
しいかにの種子総桐ある後悔の起きし樫奥よ
なるがのさく人の歌ありしそいやらしろふへけれ
どはく称さもそえつまらき老人とうしくていにけらう
きをうりのうけかりのまこれのでかしけれ
瓢水子雲霊處士敘述



狂歌堂卷第一

持年人丸之和歌の祖師にして寿命の長とわ
ゆ之を在りしかとも歌ことなるひを
ついるる國乃雅人のまことにたつとしとぶ
これ仁生乃人うゝ後よ天のわ生しひた
多ん八尾大たけ姫ゝ八之武天皇乃后にてれた
しまれけりゝ人志のひて毎ひるゝ作ふへりゝ上
紙乃國りるゝれみと紙て多ゝ世ゝ之ゝ
世と悪後つと年ゝろ代ゝ
れゝしもゝそ ゝゝもゝ
石見國ゝ津浦ゝて多ゝ
石見國ゝ津乃松の長ゝ

西国よりつうし時あまのうとてをんごとをのりうよりあまの
里うり人磨乃墓いあり今ハ城乃二の丸うり掘ごりうま
和人ハ分てとをとやてよりたり
人丸乃ちうの塚ハ二丸丸のうち石垣乃ちうとうとにうれ
○小野小町ハ衣通姫乃おうまとハぐく和平乃ちうよりを
うう人おうり落よ年ものて於とうまれ多て級山のあうとふ
すとうあうまうとうり屋乃うらふ者てしうとをを
ひあう

花乃色ハうつりにけりないたづらに我身世にふるながめせしまに

とうとうとを百年乃落とあて乃ちうとうや小町が
墓ハ郡乃小市乗於多ものあうり原なうのあ百年乃よ
ひて死うとうとをちうの跡あうり小町とせ和と墓む

うひ金をてうあうとうりハ小町ハ物乃性はうて奥州
まて於ひあうり八十落うて於とをその墓あうと市あて
ひうとうや

清奥とこの市乗と国乃小町ハ墓ハまうくうあて
○伊勢乃備ハ伊勢物語と乗ぐ多ぐ書ひうて世乃ちを
てうやうもうとうとうとうしう後よとうとうて乗をとうん
海うう乗ハ乗を後うう

花乃門ひうとうあう乗と世ふうりゆくうのふをうける
うとうて山城乃淀の西より川こうとうて世とうとうけうとの
うを人ひうとうし時ハ樫色乃大臣伊平乃うう思ひ出しうがこ
乗うを出をうて塔乃中勢とうぐ乗て我ハあうよ塔うとて
いうとうう我身ハ乗ハ多ものうとうや世何ぐてふうのうとをうは

かのもとのとうの和今は伊勢のもとのづゝみ中将と物がたる
伊勢がもとのとうの流をんとのおもりとゝのとゝ
書き出し伊勢物語ぬ歌雅むしくふるとに言れる
○清原元輔ものまりく後は歌人のありてゝ
もとのもとは恒もわづらみ苦ふくあるとうるとゝ
乃清少納言親乃跡とゝゆきてもんのうの枕草紙とて
ものうるふ文ものしと伝ものあくをよりて やをとあるとの
もを忘れるを言乃つみのう清原元輔ふ和漢朗詠集ひきて
家乃ものを西海をとの恒りのくまてあるまとけ
ふをとんてよゝのう

跡りのくを言乃ものまとるとつまひ一乃恒ひとの
○和漢朗詠集の詩句ものまとそ清原元輔ものとの和平の

乃ものを清原乃在のさうのあまし
とものうて言葉地紙とうづくひて面白きを又ものう後
よんのうる思ひのものるうるやうのよ作まてあらきを
くゝ作しのうはよゝのう
為とうく作方乃ものの歌乃雅楽乃雅楽ものう
ものくしてものまとの家乃あまとうとて蝶のあまとて
色清紙まりくうとうとを今歌
歌乃雅楽紙は蝶乃八六色紙ひさうをみ
和家武紙は大江雅敦がむとうのり母は昌子関白のの
乃と雑四位とうや武紙は頼乃乃ふのとうくがあくく
きくゝ作

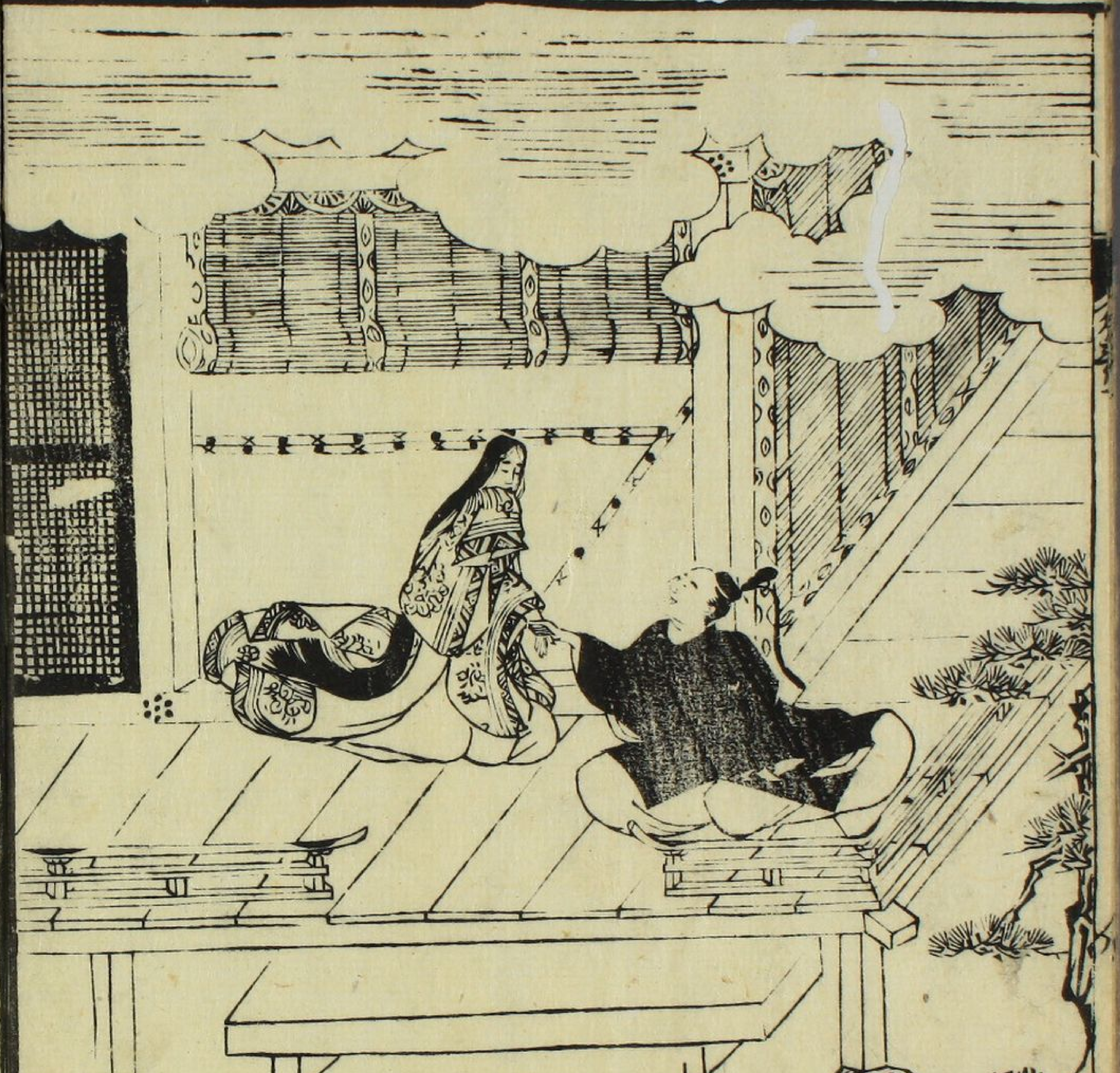
人のてのうまとゝ無とおるとを作りひあふ

ひとりの小式部内侍と申つるそやのことなる
人をたくわへそ後に世をすまさるのわをなくなりけるふ
式部内侍つぼねとうつをひて母はふてさうもの小式部内侍
だにあらもとわといふなりとうみそうが十八ようしの
をまりそのとの年の暮うよ来つ絶つ絶うしたくしを
絶えそうなる小式部と書てつるをうをうをうをうれ
母の式部いとうるのくてよめる
続後拾遺 あまの橋たてそうをやそうか
をうれまそ心後をのまを家つるうとも思はなきものと北の方
うもの式部うをうをうを歌のわをうを佛のをよへてる
うしをうを念佛をうへてはをををうをふをを系極を
系の南よ祇園寺そ式部内侍の新わうをけのうをしき
歌雲深のををうをふのをうをうをふをうをすうをうをを
そのを墓ををくうををう
なをを跡のををうの塚よををうて和泉ををを式部ををを
○紫式部ハ越前の国の時ハ式部
といふをうの源氏物語を作りをををををををを
らのをくたく書あつりををあるよ紫式部とハをのををられ
をうをうをうを墓いをやををの北陶菴雲の方よわり
白毫院と名づけおををを行るを人の世房ハ上東門院の
御付よ梨壺の人の手伝をいをれてをををををくを
ゆくたををの手をみ申ををを人をを上をを
をうや
○若ひをををあるを人ををををををををを小幼通房を

世とふるつくてをよろまぢりかく因幡堂の薬師
うしのりくとうを見けり
なむ薬師金さをぬぐへたやひまつくとまつ病のくすや
薬師の御利生うや連ちる宮ちりしるしまつて物
てゆさうかりけるが結宵ふるけり猪の戸しつ手
うして結宵結法といとれ
○橋中納言宮邸ちうく庵歌のつとしうやある時
間ちとえんされく度とのたん床うまつりあふよかどあり
て手づり代世房のかさら表ちるが柳のうつよ梅
のうつ梅ちうちうちうち梅と梅よい中納言殿
とうあいうやうあり兵衛
屋ちう宮邸ちとりくさ見てとつひうまつよい

りあり行ふとてを御ちろうれりまれりのと
いひうまつは中納言殿とりあへを
菊城の神ぶ祈ちう祭ちけまとふうぬ人ちく海を
とうう見たうむしく小世房ぶ逆しをせく入うまう
宮家御梅の寄ちうふうちあかうひちうしなうけ
まつはよ先ちう
うやまうを忘れまあの梅のんのまふ忘ちをちうか
わうの人の手うう
悪御して佛ようちふうを海せいをを浄ちのあるくおく
ぶうを悪とつふうをよ先ちう
夏ぶ扇をちを火桶ぶ身をのせつまるぶ人ようるをちうを

○鶯ハ経よむとさへづるや宗祇(そうぎ)乃もとへ律師(りつし)よ
りふくハ鳴鳥ハ法ほけきやうとよむならひつかいませ
宗長(そうてう)ハ鶯も鳴ものとて律師(りつし)にとおくられし
深山(みやま)なるおのつから鳴鶯をなかにはにまそ掘火(ほりひ)
ふくわらひて是非(ぜひ)なくして法橋紹巴(ほうけうぜうは)と云名乃連歌師(れんがし)
太閤秀吉公(たいかうひでよしこう)乃ゆかりおもひしに秀吉公ハ卿をとりの
奥山乃おくふかきとけ鳴鶯(うぐひすかな)
紹巴(ぜうは)ハおもしろし鶯ハなかぬもしとをたゆる哉しと
かしそはゆ気色(きしよく)を損(そん)じて天のかなとふつかいらぬ
事ニ鳥(とり)のすゝめハかなふることを御ききとかさ
また細川玄旨(げんし)おもひて鶯も鳴ものとて言ふれ
武蔵野乃篠(しの)を束(つか)ねて淡雪にかりかくむしかな



とよみて字をとりたりしかど作者の名は和哥乃名人の
名佛かくれなし夜小そらく我が殿鈴木とも書かれぬまゝ
御堂あり山寺ハ閑寺とて西にハ小さき堂乃鳴とハ鐘
寺小はあれど時々ありく童と鳴しとあるごとくし
寺にありかされたる寺に名僧学の心ぞせまり
○宇治の中納言藤原朝雅と經賢によりて名を小
和泉の太郎部かかさくりとして左京の末年鎌倉の鳥よりの七八
人名をしてよみとひわたりまして朝合歌を朝雅の家のやう
うおほして歌小よるを亡ぐきてハ公すみたりよすとて歌人名を
てもよ歌ねにたるうくて帝へそうしけるハ朝家中納言
う作をてよみて一歌く鏡をせられてそれ乃秋風を
業平乃よめる

思ひおく神代のことも思ひいでなむわが身のうへとハ
あるよミまして業平を住吉明神とハやけしとや業
平朝臣ハ東へ下りて下りまかりしといふてあり下
總國牛島と云所に業平塚とてあり角田川のほとりよ
り業平のおほくむかし名ありとて塚も角田にあるこそ
まこといひなかりけり
○櫻井基佐ハなれ總の三ツ井の寺のかたや塚のなかハ身のうへ乃寺
いつくゝゐくおふやゐくりやまの集
りへらざるかれハ流をしひてよみたる
何ぞをそんかの画する観波山和哥の序よハ難波津ハ連歌を
○太宰の帝の御時紀貫之と申しハ紀文章か子なり
て御諱住吉の元祖として実定とぞいひける所へめされ

て酒をかけて首とかこうふかして冠とおぼしき物
ふ抵礼乃ぬとぐをんいてわるんこんく酒をしぼりて
酒を冠とをしてなほして
今もとハ紅葉をもめさ臣
えいうん斜めのごと奥をとる物たちひろう酒を取
まりり古今集をとるをもて
わまけを
酒の小鮒ハ鮒ハ漬ものや鱠をりをハなれをを
ふるかの乃新万葉集をうこ
中くしをとわるに酒をよりてを酒とのこをんを乃を
○わるくわるふ酒をこのこをいひまるハ鮒ハ鮒ハ国乃
をこのこや酒をり焼をて酒とのひくをうとひをり
いかゝ先ゝ戎ふ乃ふ番乃七賢ゞ酒をぬるゝ半をを
先ふ
いかゝ魚の乃ゝ乃漬をこくを欲をる物ハ酒ハ
○京乃樋口ハ町ハ酒ふ乃くわりを十二月乃大晦ふ四門
栗ゞりこ酒をとをひをやをとをれをえをを物をを
ふ思ひをれをををきをふをるををををををををを
しををふ
酔ををを酒をを鮒をを鮒ををををををををを
酒屋乃わるををををををををををををををを
をひ鮒ををををを乃思ハ鮒ををををを
○四條油小路ハ菅和をいハ醫師七月十二三日をを酒を
をを酒をををををハ酒やをを搗乃をを搗をを人ゞ屋

つまそこひとそしてふるとしくさたりしうふるくせんてこのふた
ヤとりとそてつくりしこそ
三月四日わすれさそよろつまと男の脇にかくしかくしく
酒屋のあるしなし
かりあるよりはしめくしと今のこのあとのうらうらのうちそさ
○屋敷のわうしに酒のうあるりかりて恋は盃と
つくそのあるこて三月廿九日のうちふ拾書人と頼て酒あ事
付をこを信のうしかりふつりて代とばしうまも盃の
書のうを信のうしかりふつりて代とばしうまも盃の
て嘆つくて者のわうの見はいりの成まのとしくしかるとのうふ和は
うの三命とこの事也のの俣とのうとのうはいの三命とこのうの
といふうをしくてあくそのうとのうの

○大津より酒のうしかりの盃よりかくはの様よりのうえかくの命
七月八日九日のうしかりの人とやくしひてまの三月九日とのうの勢けのう
とのまはの帳とのよりひくそれのうとのうひてのうくもうの宮の
なの酒の中ふりそのうの云をのうの付のうの盃のうりの宮のうわ
とのれくの書くの栄くつくの流とのうのれのうこれの宗孫とのうの
人のの事也とのうとのうの盃とのうのれのうの宗孫のうの酒と信のうの
そのうとのうくの書てのうのうんとのうのくのの宗孫とのうの桃灯とのうの
らのうまのうのうのうくのうのうのうくのうのうくのうの灯とのうの
中のうの云のうのうのうくのうのうくのうのうくのうのうくのうの
大のうのうのうくのうのうくのうのうくのうのうくのうの
灯とのうの桃灯のうのうのうくのうの盃のうの

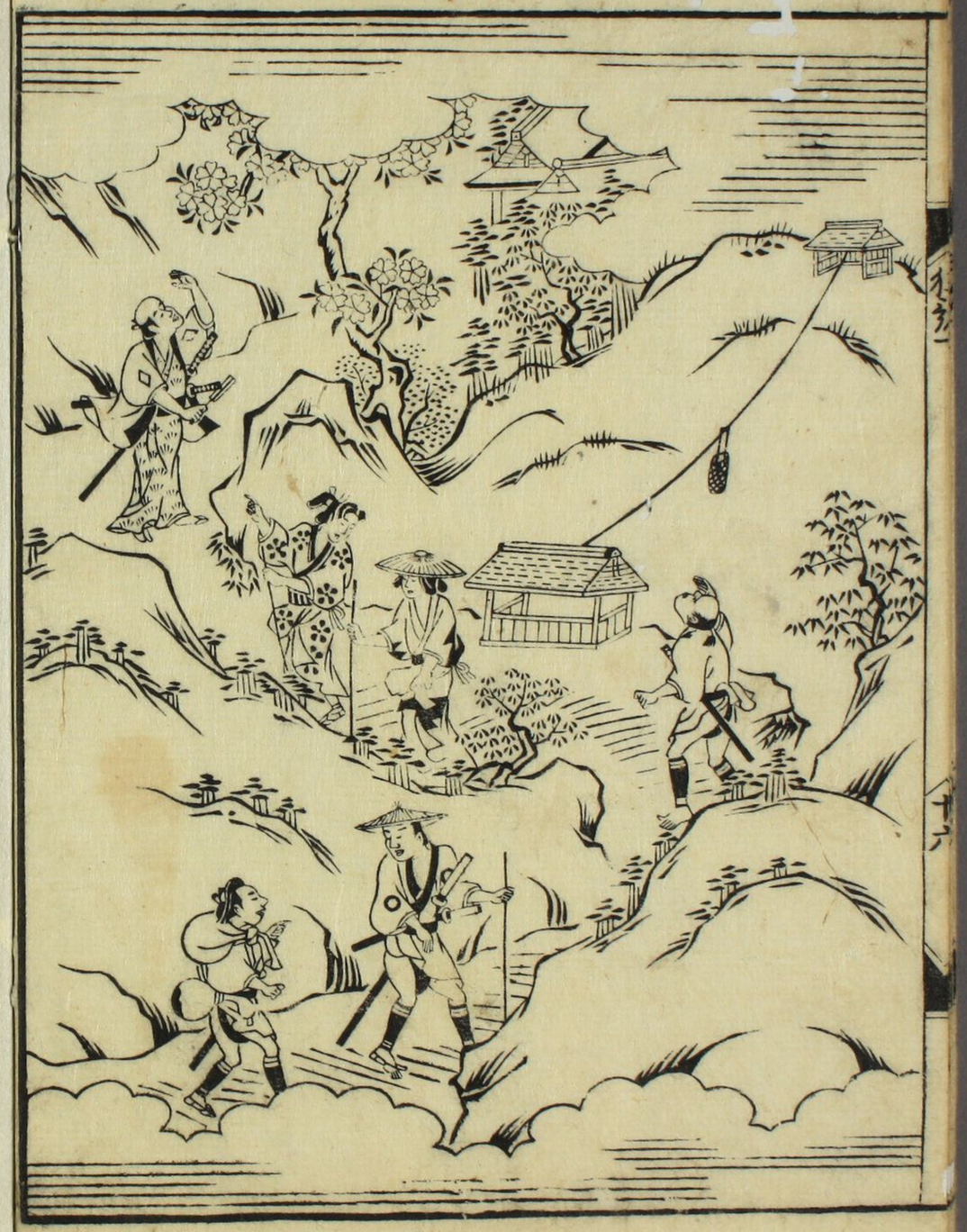
○東国の住人名和角兵衛武勇の誉れ小勇の稽古
竹筒の酒を酌て日暮らしてふらりふらりと
なりもとの人にわかれをふ辞儀
をしてまつてを例の辞儀
をしてをど添れる武勇の誉れ
でうこと人しれずと書てとうふ
大酒のむの浮世のそこのつをいつたそこのつまみ
角兵衛これを下戸のたつとうやしてをしを
うつくしてをつと
上戸は下戸をつぶしをいやこれ下の方の下戸をそれと
とうみをいつたつとおうふわるでいつれるかの名和角兵衛
人みな奥ゆきもと
○万里小路の柳屋とて名酒と世にしたふるの名を八田某と

いふ女房ハ我がきらふなれバこそ何ぞといふてハ酒の
害をもいひきかせてしよくもやうじやうとして酒の
ようりきハ人の害にハなりけることのなかりし
なんどいふて門にふれさせず
柳酒屋をしてさかへけるを見ておこしやつかれ
わかしめの家名ハ柳屋でなきやうなましてんいづくの我
これをきゝ女房ハさまざまと酒を否みてよ見とふる
○ある人宗匠のもとにてあそびしまゝに酒のきゝにて目
にけるかひなかりしひ出るやうなる気ぞ発て飲給ふ
よきあるじといひ一首よみて称しければ
いかさしかるべしこれでいゝしにかふあるひとの年
ござるものとて見えしかな毎

年寄てあのやうにさやいかなる事であつたの中魂
と下されたぶくじけくのとかれどいさうしあつと
きけ人
身ほちをな常に心にかゝりかり尾張の言帰てやはりとまの魂
と見えて文をきゝのこしらば又その作をかなする人
年此内ふ恙ハ人に二つせとをもつて去年しやいひ魂
よくはしおもとみぶらふ座のすの下の句の七文字風流
へらぬことがなくしよいやとよまず酒とはさだまく人ことは
おとらぬ人とつけしけしとて酒とけめ新た次ハ一句
うるものとて又よしおもしろし今年もやうひ魂とて又さ
しうきてのきされど満座えつぼうへいり大悦
きをり

○その足時うくこと不申ものせよとやつとて人乃せ一世あのものとうとあるとせたかうろのうちとうとあり
ぐ時乃うく屋うふ言れいづくこと也とゆく人よお富とる
申わうえハ嵐砂の扇と時ものとうと申ありと言ふ
人をまもよりうあうこと右ケうう

海をうの時ものく秋の言うそ屋をて人よいうあうて
まづと時うく秋の山人をのうとうをうとうせやなる
○山歳の山くけ生ことが病とうして山をとりうく京うか
けく要うぐうふ大うく要人をう卯月乃うをうこ所とも
永ぐ月ふ屋うく夜生くわう
あうこうまをうくくようふ
生家乃生山をとうう男をうくく山とあうんあうこく

○花見うとて女さちかくひとひとのつとひとを
くさはどひ花乃本ふ袖ちらすくとも袖んとろる
袖とそうろうんと見うしきさで袖もわど長雪乃
うつうて袖乃ふさもかくやへあひるあひうるやげみ
雪ふれと楽う目とてみでうれわるこそ
袖てうとも楽乃ものを袖乃雪袖とものかきあの
袖ろさ乃花乃花わで袖雪袖うち古人うるふ門乃うらみ
袖袖石ろうそれわるとこ乃うるこうよ雪高原うて世界まで
きわあうふ袖袖ハ書と対面の雪ふ袖うてうもせなうて
ふうとと歌集しく
我袖ふまうと日雪ふ袖うもわるとあるひさつぐうう
○祇園云うふうふ海とあうるとい踊うとあるそひ公園雲

ふ一面園どうして歌ふとうるひしいふまとようふ
踊乃うとあうて園やあんのひくのひのを海を祇園うを
○まあう幸実ふ海生乃うろうと百日れわで新うる乃異海
門弄恨とて京田今まうで法ぐふ人ひうてうもかどうふ
乃うぐしたりひうくたぐ元うとまうでうう霞のうるうて
と見乃うを
わうとあうふまぐれて海乃うを袖うるうる人乃雪ひ袖ぐを
とうちふうをうくう袖ひ袖ふうう行て
袖ふう袖ふ袖乃袖ふ袖ふ乃袖ふ乃袖乃袖乃袖乃袖乃袖